

Journal for Peace and Nuclear Disarmament 創刊号へのメッセージ

ラッシーナ・ゼルボ包括的核実験禁止条約機構〔CTBTO〕準備委員会事務局長

『平和と核軍縮』誌の創刊にあたりまして、編集長の吉田文彦博士と長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）の皆さまにお祝いを申し上げます。我々はいま、不確実な時代を生きております。無数の問題が、核不拡散・軍縮の分野だけではなく、国際の平和と安全一般においても、強固に存在しています。したがって、本ジャーナルは、批判的な分析の裏付けを伴った創造的な解決策が以前にもまして求められるきわめて重要な岐路において創刊されたものと言えます。

包括的核実験禁止条約機構（CTBTO）事務局長の立場として、そして以前には国際データセンターの所長として、私は日本を訪問する機会がありました。広島と長崎の平和公園に訪れ、記念碑に献花をし、原爆資料館に学び、原爆ドームを見学いたしました。最も重要なことは、原子爆弾を生き延びた人びと、ヒバクシャにお会いしたことでした。核軍縮の大義を前進させるとの深い義務の感覚を得ることなしに、彼らの話を聞くことなどできますでしょうか。

CTBTの実行に備えることを任務とした組織の長として、私は、核兵器の呈する問題に対していかに新たな解決策を生み出すか常に考え続けてまいりました。もちろん、私の第一の責任は、CTBTの発効に向けて努力することであり、検証体制のすべての柱を確立することにあります。しかし、私はまた、核兵器の拡散を防止し、その完全廃絶に向けた道を切り開く具体的措置を実行に移す取り組みを強化する火急の必要に駆り立てられてもいるのです。

この目標を達成するもっとも現実的で、達成可能で、効果的な次のステップは、核爆発実験を、法的拘束力があり、実効的に検証可能で、信頼性をもって執行可能な形で禁止することにあります。CTBTは核軍縮という課題に関するもっとも歴史のある手法のひとつであり、平和と安全を求める科学外交や多国間協力、技術的検証を体現したものです。こうして、その成功は、さらなる核軍縮・不拡散の措置へと扉を開きうるのです。

本ジャーナルは、専門家による分析と深い研究によって、学際的アプローチで理論・実践両面からの研究を行い、核軍縮に貢献しうる政策やその他の考え方に関する提案を行う基盤となるものです。本ジャーナルが、CTBTの発効に向けた政治的障害を乗り越える手法の追究を含め、核軍縮のあらゆる側面を前進させる対話を、政府関係者や学者、市民社会の間で促進するであろうことには疑いはありません。

核兵器なき世界に向けてたゆみなく努力し続ける必要があることが、現在ほど明確な時代ありません。核兵器の破壊力、無差別的な性格、人間や環境に与える壊滅的な効果が、強力に研究される必要があります。これらのリスクが完全に理解され、認識されたときに、国際社会は、核兵器の完全廃絶に最終的につながる一貫性のある政策の必要性に関して一致することになるでしょう。本ジャーナルの発刊が歓迎すべきことであるのは、このためで

す。

『平和と核軍縮』誌の創刊に対してお祝いを申し上げ、核兵器の脅威のない世界を達成する継続的な努力を行っている RECNA をご推賞申し上げることを非常に光栄に存じます。

2017年12月6日